

熊野・西国ドライブ巡拝記

熊野三山と西国札所(第一番～第九番)

平成12年12月26日

平成15年1月31日(pdf化)

阿部敏雄(敏翁)

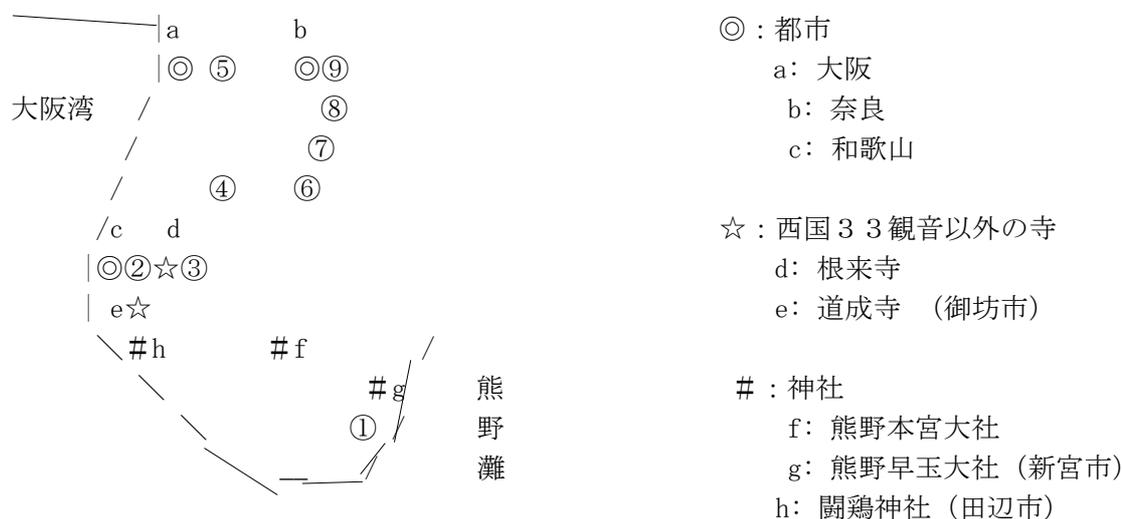
この旅行記は、平成8年(1996)10月27日から30日まで、熊野三山及び西国三十三観音霊場第一番から九番までドライブ巡礼した時のもので、パソコン通信PC-VANのSIG「NTRAVEL」に掲載した文章を主体にしたものに画像を加えて纏めたものです。

目次(見たいところをクリックすればそこにジャンプします)

I. はじめに	2
1. 1 旅行概略図	2
1. 2 旅程概要2	
1. 3 レンタカー	3
1. 4 持参した主なもの	3
1. 5 熊野信仰の発祥	3
『熊野権現御垂跡縁起』	3
『熊野の秘密、三川合流の地』	4
『熊野年代記』『熊野之本地』	4
『三所権現』	4
II. 【青岸渡寺(西国三十三観音第一番)、熊野那智大社】	5
III. 【補陀落山寺】	7
IV. 【神倉神社】	7
V. 【徐福公園、阿須賀神社】	8
VI. 【熊野速玉大社】	9
VII. 【熊野本宮大社】	9
7. 1 『熊野十二所権現』	10
7. 2 『熊野御幸』	10
7. 3 『一遍上人』	10
7. 4 【大斉原】エラー! ブックマークが定義されていません。	
7. 5 【伏拝王子】	11
VIII. 【湯ノ峰温泉】	12
IX. 【中辺路・熊野古道】	12
X. 【田辺市、鬮神社】	13
XI. 【道成寺】	14
XII. 【紀三井寺(第二番)】	15
XIII. 【根来寺】	15
XIV. 【粉河寺(第三番)】	16
XV. 【施福寺(第四番)】	17
XVI. 【壺阪寺(第六番)】	18
XVII. 【岡寺(第七番)】	19
XVIII. 【法起院、長谷寺(第八番)】	19
XIX. 【南円堂(第九番)、正倉院展】	20

I. はじめに

今年(平成8年(1996))3月に西国33観音の第10番から第21番を回り、この秋に1番～9番を回る計画を立て、いろいろ調べて行くと、その成立の過程が熊野3山と関係が深いことが解り、今回はそれらを合わせて回る事にしました。

1. 1 旅行概略図

①～⑨ : 西国33観音札所

但し、①は、第一番札所 青岸渡寺と熊野那智大社が隣接している。

1. 2 旅程概要

レール&レンタカーを利用。

10月27日

新横浜＝(新幹線)＝>名古屋＝(関西本線・紀勢本線)＝>新宮

ここでレンタカー借りる。

→①(青岸渡寺、熊野那智大社)→補陀落山寺→神倉神社 新宮市で泊。

10月28日

徐福公園→阿須賀神社→(g)熊野早玉大社→(f)熊野本宮大社→(熊野古道・中辺路)

→(h)闘鶏神社(田辺市)

南部町の国民宿舎に泊。

10月29日

→(e)道成寺(御坊市)→②紀三井寺→(d)根来寺→③粉河寺→④施福寺

→施福寺門前の旅館に泊。

10月30日

→⑥壺坂寺→⑦岡寺→⑧長谷寺、及び番外法起院→⑨興福寺・南円堂。

近くの奈良国立博物館で正倉院展を見る。

→(高速利用)→新大阪 ここでレンタカー乗り捨てる。

＝(新幹線)＝>新横浜

時間の関係で、⑤葛井寺は回ることが出来なかった。

1. 3 レンタカー

マツダ・ファミリア 1500cc 外形寸法 433x169x142 エアコン無し。
運転しやすい車であったが、問題点2点あった。その所で詳述する。

1. 4 持参した主なもの

4.1 書籍類

- 1 「車で行って遊んで泊まる」南紀 1995 昭文社 「車・遊・泊」と略記する。
- 2 西国札所会・編 「西国33観音巡札」朱鷺書房
- 3 杉本苑子 「西国巡拝記」昭和41年 大法輪閣
- 4 神坂次郎・監修 「熊野詣・熊野古道を歩く」1993 講談社
- 5 熊野中辺路刊行会 「熊野中辺路」平成3年
- 6 中上健次「紀州 木の国・根の国物語」昭和53年 朝日新聞社

上記 3～6 は、図書館で借りたもの。

4.2 カメラなど

ニコン 24-50mm & 70-300mm ズーム + 三脚、 シャープ液晶ビュウカム

1. 5 熊野信仰の発祥

熊野信仰については、沢山の書籍が出されている。私の読んだ中では、学問的な香りの強いものでは、

宮家準・編「熊野信仰」民衆宗教史叢書21 平成2年 雄山閣

宮家準 「熊野修験」平成4年 吉川弘文館

などがあるが、解りやすく且つユニークなものとして

梅原猛 「日本の原郷」1990 新潮社

五来重 「山の宗教 修験道講義」平成3年 角川選書223

が面白い。少し長すぎると思うが上記五来氏の本から以下の旅行記に必要と思われる部分を抜き出してみる。

『熊野権現御垂跡縁起』

熊野三所権現は非常に神道的な要素が強いので、従来、熊野神道とよぶべきだと考えられていました。

熊野の発祥についていろいろの史料があります。その中に『熊野権現御垂跡縁起』があります。この非常に荒唐無稽に見える『縁起』は、おそらく平安中期までさかのぼるであろうと思われます。

その中で、熊野を開いた人は中国の天台山の「王子信」だといっている。この人が日本へ渡ってきて熊野の神になる。いちばん最初は彦山へ飛んできた、と書いてあります。『縁起』に、「往昔甲寅年、唐の天台山の王子信の旧跡なり。日本国鎮西日子の山の峰に天降り給う。その体八角なる水晶の石、高さ三尺六寸なるにて天下り給う」と、水晶の石になって飛んできたとある。ずいぶん不思議な話ですが、これの意味するところは、仏教渡来以前から彦山なり熊野なりは開けていたという自己主張で、これがいちばん大事な点です。山岳宗教というもの、修験道というものの発祥は仏教の渡来とは関係がない、むしろ仏教渡来よりも古いということを言っているわけです。

もう一つは同じ神様が彦山にも、石鎚山にも、羽山にも、紀伊国の切部山にも、熊野新宮の神蔵山にも行き、それから新宮の飛鳥社にも行き、最後には本宮の「大湯原」というところに行き、三つの月形になって木にぶら下がっていた、と書かれています。「壬午年、本宮大湯原の櫟の木の本末に三枚の月形にて天降り給う」。だれが見たのか知りませんが、とにかく天降った。そして八年経てはじめて狩人がこれを見つけた。

熊野部千与定という犬飼い、つまり狩人が猪を追って行き、猪が倒れたところが櫟の木の根本だったので、そこで猪の肉をとって食べながら、木の下にひと晩宿っていたら、三枚の月形が見つかった。訊ねてみたら、「われは熊野三所権現なり」と言った。「一社を証誠大菩薩と申す。いま二枚の月形を両所権現となん申し仰ぎ給う、云々」こういうふう書いてあります。

ここで「両所権現」といっているのは、新宮と那智です。そして平安の中期には「三所」といっても、じつは別々に発達したもので、ほんとうは本宮、新宮、那智、これが三山として構成されておった。別々に発祥したものが三つになっていた。

それと同時に、彦山も石鎚山も諭鶴羽山も熊野も全部一つの神様であるという主張が、『縁起』の中に出てくるわけです。ということは、熊野の勢力がこういう山々をすでに支配下に置いていたということです。

現在、全国で三千社ぐらい熊野社が数えられますが、とてもこんなものではない。昔はその十倍も二十倍もあったと思います。廃仏毀釈以後に、那智大社の調査で三千社あるとリストアップされていますが、いちばん南のほうでは、もう鎌倉時代に沖縄に入っております。だからどんなに勢力を拮めたかということがわかると思います。沖縄では、一宮に当たる波之上宮という那覇のお宮が熊野神社なのです。そういうことで熊野は一時期、宗教界の覇者であった時代があると考えられるわけです。

『熊野の秘密、三川合流の地』

現在の熊野本宮は、もと祓戸(ハイト)王子という王子のあったところ。明治二十二年に旧社地は大洪水にあって、熊野川の氾濫で社殿の屋根が隠れるくらいまで水が上がった。それで、これはたまらないというので、現在地に移したのです。その元のところを熊野本宮社の「大湯原」といっています。

ここは音無川と熊野川と岩田川という三つの川が合流するところで、中州ができていた。ですから、昔から洪水になれば水につかっていたのだと思いますが、しかしそういう、つかるところだから新鮮だったと思います。そのたびごとに新たになりますから。

「大湯原」というのは、湯ノ峰だろろうという人がありますが、じつは湯というのは清める、潔斎するという意味です。湯川という名前があるからお湯が出たのだという人がいますが、そうではない。その川でお清めをするからです。

潔斎の斎をユと訓みます。イとも訓みますけれども、清める意味の言葉です。

『熊野年代記』『熊野之本地』

上記『縁起』の他にも史料があります。その中で『熊野年代記』の成立は、だいたい室町の中ごろだと思いますが、この『年代記』には熊野を開いた裸形仙人という人が出てくる。裸形上人ともいいます。いつも那智の滝の下で裸で行をしているというので、この場合には那智がいちばん早く開けたという主張になります。

それから『熊野之本地』という縁起に、熊野の発祥のことが書いてある。『熊野之本地』は善財王という印度の伽羅国の王様に千人の女御がいて、その中でちょうど千人目の女御に当たる五衰殿女御を王はたいへん気に入って、初めて新王という子供が胎内に宿る。そうすると、あとの999人の女御たちがたいへん彼女を憎み、いろいろ讒言をして、五衰殿女御の生んだ子供が成長すれば父を殺す、国も乱れると言いつらして、女御を山へ棄て殺すが、その殺した腹から新王が生まれて、狼や猪や熊に育てられるという話です。

山の中で七歳まで育てられたときに、女御の弟に当たる、新王にとっては叔父に当たる祇園精舎上人という人が、夢に自分の甥が山中にいることを知り、これをたずねて拾い上げて王の跡継ぎにする。

それから先が面白い。たいていの「御伽草子」には、インドのこととして、こういう継子いじめの話、あるいは嫉妬の話がたくさんあります。そして最後に、こんな国はいやだから、ほんとうの仏教の行なわれる国へ行きましょう、とって日本へ渡ってきたという話になります。

これがどの話にもついている。ということは、中世の人々は、日本がほんとうの仏教の行なわれている国だと思っていたのです。これは誇大妄想でもなんでもないと思います。

そういう主張が民間にもたくさんあって、インドの話としていやな話を述べておいて、最後に日本が出てくる。そして日本へ着いて、祇園精舎上人が「本宮」の神になる。それから王子が「新宮」の神様になる、というところまで書いて、そのあと那智のことは書かないのですが、那智は女の神様ですから、おそらく五衰殿女御を「那智」に当てておったのだと思います。

ところが王も王子もみな日本へ渡ってきたので、あとの999人の女御たちもその後を追って日本へやってきた。そして熊野の街道に生えているイタドリについている赤い虫になったと書いてある。

なるほど、イタドリの葉の裏にも赤い虫がついております。

『三所権現』

「日本第一大靈驗所・根本熊野三所権現」という札が、那智にも本宮にも新宮にもかかっています。

いわゆる三所権現というのは本宮、新宮、那智です。本宮の十津川の下流に当たる砂州は、おそらく水葬されたものが流れ寄るところであったのではないかと思います。そういう死者の霊は、祀れば豊作をもたらしてくれたり、

豊漁をもたらすという信仰があるから、祀らなければ祟るし、祀れば思籠の神になるということで、食物の神様になる。

これを「家津御子(ケツミ)神」といいました。ケというのは食物ということです。ツはノです。それで家津御子は食物の神という意味です。その地方の人々にとっては食物を与えてくれる神だったのを、『日本書紀』のほうで素戔鳴神としてしまった。家津御子神という名前ものちになって出てくるので、平安時代ぐらいですと、熊野にいます神というだけで固有名詞がない。熊野坐神、とだけしか書いてない。それを地方の人々はお詣りすれば豊作になるというので、家津御子という。室町時代頃からは素戔鳴神というふうになった。これは亡くなった人の往生を確かめてくれる神様というので、阿弥陀如来になる。ですから往生を証明する神ということで、ここを「証誠殿」といいます。平安の頃から証誠殿という名前はもうできています。

それから新宮は伊弉諾(イザナ)神である。「熊野速玉神」は伊弉諾神の子であるということになって、本地は薬師如来である。

那智のほうは「熊野夫須美神」といわれましたが、夫須美というのは結びということで、生むことである。あるいは産びといい、生むということです。したがってこれは、伊弉冉(イザナ)神であるということ、本地は千手観音であるという熊野神道ができてきます。

そうすると、素戔鳴神と天照大神が伊弉諾、伊弉冉尊の子で、相反する徳を持っていたので、天照大神を若宮にあてました。

以上、長々と引用してきたが、これでも法華経信仰との関連など大分省略してある。それらについてはそれぞれの場所で触れることにする。

次回から旅日記が始まります。

熊野・西国ドライブ巡拝記(2)

敏翁

10月27日(日)

大きな鞆いっぱい荷物と三脚を「キャリー」に乗せて家を出る。駅の階段が結構きつい。

新横浜7:48 ひかり205で名古屋9:28着

名古屋9:50 関西本線・紀勢本線特急、南紀3号で新宮13:03着

新宮駅のレンタカー・オフィスは観光案内所と同居している。手続きと同時に、「熊野古道を訪ねて」という良い資料を貰った。

又、本日は那智山で「あげいん熊野詣(第11回)」が開催中との事でそのパンフレットも貰う。大分混んでいるらしいとの事。

II. 【青岸渡寺(西国三十三観音第一番)、熊野那智大社】

国道42号に出て約12kmで右折し那智山に向かう。

しばらく行ったところが青岸渡寺駐車場への有料道路(800円)入口だが通行止めになっている。管理のおじさんの弁によると、今イベントの真っ最中で混んでいるためであり、15分ほど待つて貰いたいとのこと。

暫く待つて開通したが、本日は特別なのか800円取らない。登り、三重塔の側を通り、青岸渡寺脇の駐車場に行ってみると駐車場は空いている。

三重塔前広場で行われていたイベント「大護摩祈祷」などの見物客が溢れていた為に通行止めにしていただいた。

イベントは終わってしまっていたが、護摩の残り火が



まだ白煙をもうもうと出しており、参加したのであろうお稚児さんなどの姿もちらほら見られて華やいだ雰囲気は残っていた。

西国三十三観音・第一番札所・那智山・青岸渡寺にお参りする。拡声器がご詠歌を流し、白衣の巡拝者も大勢いでそれらしい。

納経帳の中央に「普照殿」と書いてくれる。そこのお坊さんの話では「これはくあまねく照らす」という意味です。く大悲殿と書くのが多いがうちの他では壺坂寺がく普照殿です」との事である。



寺の見晴らし台からは、三重塔とその向こうに「那智の滝」(＝大滝)が見える。前述の護摩の残り火の白煙で滝が霞んでいる。(左図)

ちなみに、三十三の数字は、観世音菩薩が三十三種に身を変じて、人々を救ったという伝説に基づくもので、霊場巡礼も平安時代から既に行われていたらしい。奈良長谷寺(第八番札所)の得道上人(656～?)が、養老2年(718)の春、病のため仮死状態に成ったとき、閻魔大王から悩める人々を救うために三十三ヶ所の観音菩薩の霊場を広めるよう委嘱され、そして三十三の宝印を与えられて仮死状態から解放された。上人は三十三ヶ所の霊場を設けたが、人々が信用しなかったため、やむなく宝印を撰津中山寺に埋めたと伝えられている。

270年後の永延2年(988)に、花山法皇がこの宝印を掘り出し、今日の三十三ヶ所を復興されたと伝えられ

ている。

ただし順位や、寺々の選定について、現在の形になったのは、室町中期から江戸初期らしい。当初は長谷寺を第一番としたらしいが、現在の形になったのは、平安朝以降、貴賤男女を問わず「蟻の熊野詣で」と呼ばれたほどに人々を駆り立てた熊野信仰に関連しているのであろう。

花山法皇も、永延元年(987、これは天皇退位の翌年になる)に熊野御幸をされている。(退位の事情については、小生の「西国ドライブ巡拝記」(2)を参照されたい)また更に法皇は正暦三年(992)より千日間の山ごもりをしたという言い伝えがある。那智にはこの花山上皇がこもられたところ(上述の大滝の上にある二の滝の近く)がある。



こうして花山法皇は世を捨て、ひたすら仏道に耽る人間の先駆として、後世の人たちによって神格化されることになる。西国三十三ヶ所参りも花山上皇によって始められたとするのもこういう伝承によるのであろう。

実際は法皇は相変わらず放恣な女性関係を続けられ、仏道と芸術に耽られたのである。もとより、花山法皇においては仏道は女色と矛盾するものではなかったのである。

世の中はみな仏なりおしなべて何れの物とわくぞはかなき (千載集十九 釈教)

これは天台本覚論の一つの帰着点であろう。全ての人は皆仏であるから、どんな女性とどんなことをしてもかまわないということなのであろう。

青岸渡寺の塀の隣は、熊野那智大社である。鮮やかな朱塗りの拝殿が南向きに建ち、その奥に一直線に5棟の社殿が並んでいて、その中で一回り大きい第4殿に祀られているのが、この大社の主神の夫須美(フスミ)大神(＝伊弉冉尊)であるのだが表からは良く見えない。青岸渡寺はこの大社の神宮寺として12世紀に成立したのである。

Ⅲ. 【補陀落山寺】

来た道に戻り、国道42号に入る直前に「補陀落山寺」がある。

参拝者は中高年の婦人5人ずれがいるのみだった。本尊(三貌十一面千手千眼観世音 重文)の前で、一緒に住職(?)の話聞く。この仏は平安後期の作であり千手観音は熊野には珍しいそうである。近寄って拝観できたが、確かに良いお顔立ちである。いつも開帳しているわけではないとのことで、婦人達とその幸運を喜んだ。

ここは、補陀落渡海で知られている。

平安時代に、伊勢のあたりから海沿いに南下して那智の海におよんで根着いた常世(トヨ)信仰が、仏教の観音信仰と習合される。そして南の海の果てに観音の浄土・補陀落を目指して渡海する、渡海信仰が実践されることになった。

補陀落渡海は、箱船にこもった僧が、那智湾の出口にある帆立島・綱切島のあたりで曳綱を切られるものであった。

一灯をともし、日夜、法華経を誦し、30日分の油と食料を携えて生きながら極楽浄土に旅立つ信仰であるが、近世になると金光坊が渡海を拒んで島にあがったが無理矢理に入水させられたという伝説もあり、生きながら渡海をするという慣習はなくなり、当時の住職が死亡した場合、かつての補陀落渡海の方法で水葬をするという儀式に変わっていったのである。

寺の本堂の中に渡海船に使用したと伝えられる部材が飾ってあった。

住職に渡海上人の墓の有り場所を伺い、裏山に訪れた。

殆ど訪れる人も無いような裏山に、いくつかの渡海上人の丸石の塔がひっそりと立っていた。



補陀落山寺

Ⅳ. 【神倉神社】

42号に戻り、新宮市内の神倉(カノクラ)神社を訪ねる。

小さな太鼓橋を強引に乗り越え境内に駐車する。石段の登り口に杖が2~30本置いて有る。その一本を持って石段を登り始めたが、その急なことは恐ろしいばかりである。45度もあるかと思われる急傾斜に合わせて、石は自然石そのままのようで、一段の高さ、平面部分が全く不規則なのである。

息を切らしてやっと登ると、後半は普通の石段になった。この石段は、源頼朝の寄進によるもので538段あるらしい。

登り切ると、ゴトビキ岩の名がある蝦蟇の形をした巨岩があり、その岩を捧げ持つ形で神倉神社の小さな社殿が設けられている。(下図)

この聖なる巨岩は、熊野信仰における原始信仰の母胎であり、速玉大社が現在の地に遷るまで速玉の神はここに在ったのだという。

またこの神社には、神武東征の際、皇軍を助けた高倉下命(タカクラジマコト)が祀られているのである。

ゴトビキ岩の写真を撮ったりしていると、神社の小さな境内で、裸足、ランニング姿で体操をしていた男が話しかけてきた。帰りもしばらく一緒だった。

2月6日の夜行われる「お燈まつり」の様子を話してくれる。

私「あの急な坂を松明を持って駆け下りるとは信じがたいのですが」

男「実際は、一部の若者が駆け下りるだけで、一般の人はゆっくり降りるのですよ」



私「それでも怪我人が出るのではないですか？」

男「殆ど出ません」

その内、彼から新宮で生まれた中上健次を知っているかと言う話になる。私が在る程度は知っていると言っていると解るといえる話してくれる。

男「あの人の考えをどう思いますか？」

私「私とは違います。大分激しい思想の持ち主だと思いますが」

男「彼は部落の出身なのです」

私「それは知っています。現在では差別は殆どないのでしょうかね」

男「差別撤廃教育が進んで良くなっています。しかし彼らは特殊な人たちです。すぐに集団で行動します」

その内、国鉄の線路と国道42号の間のXXの辺りが部落である等と説明してくれた。

男は、下りの途中で小さな末社の辺りでする事があるらしく、そこで別れた。彼がどういうつもりで部落の話に持っていったのかは良く解らない。

彼には帰り道もずっと裸足で歩いているなどちょっと得体の知れないところがあったので、「紀州 木の国・根の国物語」（これは、全体が部落問題に関係している）を読んでいることなどは伏せて置いたのである。

帰りに、車でXXのあたりを通ってみたが、車で通っただけでは、何も普通の町との違いを感じることは出来なかった。

予約して置いたステーションホテルに入る。

夕食は、新宮駅のそば「車・遊・泊」お勧めの「十二社」に行き、「すし定食」にする。なかなか良いと思ったが、ホテルに帰ってから「車・遊・泊」に出ていた写真と比べてみると、写真が立派過ぎた。

ホテルのそばに、「徐福公園」があるが、夜は門が閉まっていたり入れなかった。

ホテルで、新宮駅の観光案内所で貰った「新宮市内散歩地図」を眺めていると、普通の観光ガイド本にはない徐福の重臣碑や、中上健次の墓まで載っていた。

明日の朝一番で徐福公園と重臣碑を歩いて訪れる事にしよう。

10月28日(月)



V. 【徐福公園、阿須賀神社】

朝、ホテルで朝食後、そばの徐福公園に行ってみる。ここはかなり広いが入り口の門等は中国式の装飾で飾られている。横浜中華街の門や関帝廟を想像すれば当たらずと言えども遠からずである。

公園の中央に木立に囲まれて徐福の墓と言われるものがある。そばには漢方薬にも使われる天台烏薬(テンダウヤク)

という常緑樹が植えられていて徐福将来の伝説を残している。公園内の売店（これも中国式装飾）でもその小さな鉢植えを売っていた。

そこから歩いて200mほどの所にある小さな塚を訪れてみた。これは徐福の家臣の墓だとされるもので、昔は7つの塚が徐福の墓を囲むようにあったが現在では此処にしか残っていないのだそうである。

間口が1mくらいの真新しく白ペンキ塗りの木製の囲いの中に「秦徐福重臣塚」（上右図）と彫られた古い碑があったが、新しい花が添えられていて、今でも回りの人々に大事にされているらしい事がわかる。

ホテルに戻り、チェックアウト、車で阿須賀神社に向かう。朱塗りの拝殿があり、ご神体はその後ろの蓬莱山である。拝殿の隣には「徐福の宮」があり、徐福が求めた蓬莱の地はここであったと伝えられている。

熊野・西国ドライブ巡拝記（3）

敏翁

VI. 【熊野速玉大社】



熊野速玉大社に向かう。門、社殿のすべてが新しく、且つ朱塗りも鮮やかで境内全体が明るい。このあたりから雨が降り出し、朱色の傘の下で土産の「もうで餅」を売っていた女性が門の屋根の下に引っ越しを始めていた。

久保田展弘氏によると（神坂次郎監修「熊野詣・熊野古道を歩く」）

「速玉大社の祭神は速玉神であるが、伊弉冉尊の御子とされるこの神には謎が多い。その名に、古代祭祀につかわれる玉が見え、それが勢いをもつ意をふくむとなると、願いごとを即座に適える神と見ることもできるかもしれない。

明治の排仏毀釈までの神仏習合の時代に、熊野速玉大社には、本地仏として薬師如来が祀られていた。なぜ新宮に薬師如来が祀られたかは不明だが、私には、紀元前の昔に、秦の始皇帝の命を受けて中国から不老不死の薬をさがしにやってきたという、徐福上陸の地がすぐ近くにあることが、現実味を帯びて思い浮かぶ。」とある。

VII. 【熊野本宮大社】

国道168号を熊野川に沿って遡り、熊野本宮大社に向かう。（約35km）鳥居の前の広場に駐車する。八咫鳥の大きな幟が立っている鳥居を潜り、木立の中の石段を登る。雨のせいか一段と暗く、神社らしい。社殿は270年前に再建されたもので、熊野三社中もっとも古風な雰囲気漂わせてただずんでいる。これは元はここから少し離れたところ（大斎原〈オホハラ〉、又は大湯原）に在ったのだが、明治22年の大洪水に合い、流失を免れた旧材を用いて小高いこの地に再建されたものである。

左手奥の大きな社殿は牟須美（ムスミ 那智）・速玉の両神、中央（証誠殿）は主神である家津美子神（ケツミコミ）、右手は若宮である天照大神を祀っている。

宝物殿に入ってみる。熊野本宮并諸末社図絵（大斎原の往事の全容を描いたもの）、建仁御幸記（藤原定家自筆、国宝）の写し、熊野懐紙の写し、一遍上人絵伝（国宝）の写しなどが展示してあった。

7. 1 『熊野十二所権現』

熊野三社にはいずれも熊野十二所権現が祀られている（那智大社のみはさらに飛瀧権現を加えて十三権現）が、それは本宮、速玉、那智大社の主神（本地仏）である三所権現と、五所王子、四所明神である。

三所権現については既に述べたが、五所王子とは、若宮の天照大神（十一面観音）、禪師宮の天忍穂耳命（地藏菩薩）、聖宮の瓊々杵命（龍樹菩薩）、児宮の彦穂々出見命（如意輪観音）、子守宮のウガヤフキアエズの命（聖観音）である。

又四所明神とは、一万十萬、勸請十五所、飛行夜叉、米持金剛である。

現在の本宮大社には、上述の様に三所権現と若宮だけが祀られていて、残りの四所王子と四所明神は大洪水で流出したままになっている。

7. 2 『熊野御幸』

熊野三山が広く名を知られるようになるのは、上皇・法皇たちによる熊野詣からである。延喜7年（907）宇多法皇による御幸が初めであり、花山法皇の御幸（987）も前にも触れたが西国三十三所の成立との関連で重要だが、白河上皇の寛治4年（1090）の御幸から本格化する。

白河上皇（後に法皇） の9回 （1090－28）
鳥羽上皇（後に法皇） の21回（1125－53）
後白河上皇（後に法皇）の34回（1160－90）
後鳥羽上皇 の28回（1198－1221）

と異常とも言える回数である。

この御幸については、いくつか記録も残っているが、一番詳しいのは歌聖・藤原定家の「建仁御幸記」だといわれる。これは、建仁元年（1201）後鳥羽上皇第4回の御幸に従ったときの定家の日記である。

その内容は、神坂次郎「熊野御幸」新潮社 1992 で詳しく知ることが出来る。

主なルートは大坂湾伝いに田辺の南まで来て、そこから本宮へ向かって一直線に近く富田川沿いに東進する「中辺路（かへ）」を通り、本宮に参拝、熊野川を下って新宮、次に那智と参詣し、そこから「雲取越え」の険しい山道を通って本宮に戻り、後は来た道に戻る（定家もこのルートである）のであった。

大阪・天王寺近くから本宮まで「熊野九十九王子」といって沢山の王子と呼ばれた熊野権現の末社があり、それらを拝しながら進むのである。

その中の主な王子、例えば五体王子（滝尻、藤白、切目、近露、発心門）等では一行は垢離をとり、御歌会を催し歌を神に捧げたりした。その歌会の和歌懐紙が「熊野懐紙」である。

7. 3 『一遍上人』

一遍上人、彼の開いた「時宗」は熊野（特に本宮）と関係が深い。

時宗では、救いは名号（ミコガウ、念仏札）そのものにあるとする。一遍はかつて熊野に詣で、念仏を広めようと念仏札を道行く人に配ったが、一人の僧が受け取りを拒否した。彼は迷いを感じて熊野本宮・証誠殿に籠っているときに熊野権現が夢に現れて、「信・不信をえらばず、浄・不浄をきらわず、その札をくばるべし」と告げたと言われる。そこで名前もそれまでの智真から一遍に改め、以後「南無阿弥陀仏 決定往生六十万人」と書いた念仏札を配る布教の旅にでたという。

「一遍上人絵伝」は、上人の諸国遊行と布教の様子が描かれた伝記絵巻である。特に、本宮で一遍が熊野権現より神託を受けている場面は、絵伝の中でもっとも重要な場面と言われている。

7. 4 【大斉原】

かつて本宮のあった旧社地・大斉原(オホハラ)は、現本宮の鳥居から南500mほどのところにある。小雨の中、田圃の中の石畳の細い道を歩いて訪れる。(次頁左図)

ここは、十津川(熊野川の上流)、音無川、岩田川が合流する地点の中州で、こんもりとした森に覆われている。広い聖地には小さな石祠が二つ立っているだけ(次頁右図)である。西側の石祠には、四所王子(五所王子 - 若宮)と四所明神が、東側の石祠には境内にあった摂末社が合祀されているのである。

参詣者は私の他、女子学生らしい二人組がただけで、静寂そのものである。

十津川の河原に降りてみた。今は上流のダムのせいで細い流れしかないが、かつては、大斉原は水の中に浮かぶ小島のようにであったと伝えられている。流れは下流ですぐに急カーブしていて、向かいの山の山肌に地滑りの跡ら



しい箇所が見える。これが明治22年に地滑りが川をせき止め、大洪水になった跡なのかな(?)などと想像してみた。中上健次「紀州 木の国・根の国物語」によると、地滑り(するような)ところに部落が在ったのだという。



7. 5【伏拝王子】

伏拝王子(フシカミナジ)は、大斉原が見下ろせる眺めの良いところだとあるので、行ってみることにした。駐車場のそばの土産物屋にたむろしていたタクシーの運転手らしい男に、車での行き方を教わったのは正解だった。

国道168号を5分ほど北上し、細い道に左折すれば比較的容易に伏拝王子のそばまで車で行ける。

そこから10mほどに登ったところにある伏拝王子跡からは、幾重にも重なった熊野の山々が小雨に煙って幽玄な美しさを見せていた。大斉原も見えるはずなのだが雲がたなびいてははっきりはしなかった。(上右図)

伏拝王子碑と和泉式部供養塔が5mほどの間隔で立っていた。(上左図)

和泉式部(10世紀後半～11世紀)が何時熊野へ詣でたのかは定かでは無い。次の和歌の歌われた時、所についても種々の伝説がある。

その一つによると、式部が

晴れやらぬ身の浮雲のかさなりて月のさわりとなるぞくるしき
の歌を読み、月のさわりを悲しんで、はるかに見える熊野の社を伏し拜んだところがここであるとされ、土地の名もそれに因んで「伏拝」となっている。

さらに一説によると、その夜の夢に熊野権現が現れ、

本よりも塵にまじわる神なれば月のさわりも何かくるしき
と御託宣があり、式部は本宮参拝が出来たのだという。

この話全体が前述の「信・不信をえらばず、浄・不浄をきらわず」に通じていて、熊野権現が女人の不浄を嫌わないことを宣伝するためにこのような話を作為し唱導したのは時宗の徒であるとの五来重氏の考察もある。

ここに王子社が勧請されたのは、だいが後の事らしい。



VIII. 【湯ノ峰温泉】

本宮駐車場にもどり、簡単な昼食後、国道311号に入り、湯ノ峰温泉に向かい、「東光寺」の前に駐車する。

まず、「湯の胸薬師」を拝観する（500円）。この薬師は湯ノ花の化石で出来たもので、薬師像の胸のあたりに黒い穴があいている。かつてここから温泉が吹き出したのが、湯ノ峰温泉の始まりであり、「湯の胸」が訛って「湯ノ峰」になったと伝えられているものである。

ここは、熊野詣が盛んであった頃、本宮参詣者が身を清めるため入浴した湯垢離場であった。

又ここは「小栗判官」伝説と深くかかわっているところである。小栗判官はこの温泉（つぼ湯）（左

図）に入り全快したとされる。

つぼ湯は二人も入れれば一杯の岩風呂である。私も入ってみようとそばで管理している店の主人に申し込む。丁度小銭を切らしていたので1万円札を出すと「250円に1万円とは堪忍してくれ」の一点張り。全然商人根性が成ってない。今時こんな奴も居るのかとあきれ（何か土産物でも買えば良かったのかも知れないが）、怒りながらも諦めて車を進めることにした。

IX. 【中辺路・熊野古道】

ここから中辺路(かへち)の熊野古道で車でアクセス出来る場所を訪ねようとの計画であった。

しかし雨が激しくなってきた事と、車のウィンドウの「曇り取り」が不完全のせいで、安全運転に支障を来す事になった。

一寸車の外に出ただけで、傘がびしょぬれになり、助手席あたりに置かれたその傘から蒸発する水蒸気がウィンドウに凝結し、曇り取り能力に問題があるのか曇りを取りきれず（外の温度も相当低く成っていた）、曇りをタオルで拭いたりしてもすぐに視界不良に成ってしまうという状況に悩ませられた。

そんな事で、殆どどこも訪ねずに、滝尻王子(右図)まで来てしまった。この王子は中辺路最初の大きな王子（五体王子の一つ）であり、小さな社がある。

またその王子と道路（371号）を隔てて、「熊野古道館」と言う木造だが立派な建物が建っていたので訪れてみた。

中の展示内容などもなかなか充実していて入場無料なのがうれしい。

上皇、法皇の肖像、熊野懐紙、熊野権現縁起絵巻、定家の御幸記、一遍上人絵伝などの写しの他、ビデオコーナーなどがあつた。

絵はがきを求めたが、ここでは1万円札でも丁寧に対応してくれた（これが当たり前）。



X. 【田辺市、闘鶏神社】

311号を暫く西進し、42号に入り北進する。田辺市内にある闘鶏神社に行きたいのだ。途中でガソリン・スタンドに寄って道を確認したが、その通りうまく行けず、田辺の駅前に行き、そばにある駐車場に入る。

駅の観光案内所で市内地図を貰い、道を教えて貰い、歩いて行くことにした。

駅前には、大きな弁慶の銅像が建っている(下左図)。闘鶏神社(下右図)はあるいて5分程度の所にあった。想像していた以上に大きくて立派な神社である。



現社殿は元和5年(1619)から貞享年間(1684~88)に建立されたものであり、本殿・上殿・中殿・下殿・西殿・八百万殿に16神を祭っている。

ここは、壇ノ浦の合戦の際、源平両軍から熊野水軍の援軍を請われた熊野別当湛増が社前で紅白の鶏を闘わせたうえで源氏加勢を決意したという故事で名高い。

ここは又古くは熊野権現を勧請し、新熊野(イマノ)権現とも呼ばれた。三山の別宮的存在として知られ、三山詣に変える参詣客が多かった。また三山への中継地として熊野詣の上皇たちの宿泊の場所ともなった。

境内に湛増、弁慶の前に鶏がいる銅像がある。

湛増は、熊野新宮別当湛快の子で、父湛快の進出した、要港に臨む田辺に館を構え、新熊野権現社を拠り所として田辺別当家を興し、本宮の師職を兼ね、武威を誇り、天下の動静を伺っていたのである。

又伝説では湛増は武蔵坊弁慶の父といわれる。

銅像の横の説明では、義経の命を受けた弁慶が父湛増に頼んで、闘鶏に事寄せて熊野水軍の源氏加勢を決めたのだとある。

神社の参道沿いに弁慶誕生の地と言うのもあった。もっとも弁慶の出生の地といわれる所が全国に三十数か所もあるのだそうである。

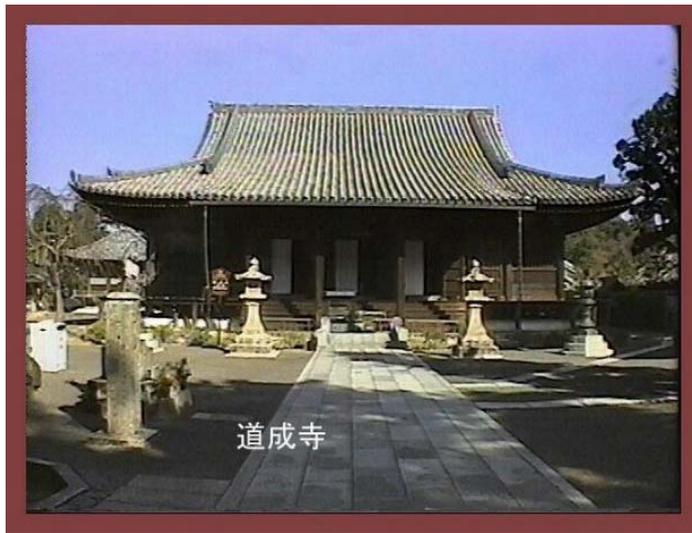
それにしても田辺の町は弁慶通り、お菓子の弁慶焼き等、弁慶の町である。

駅に戻った頃は、雨のせいもあるが、相当暗くなっていた。

これから今夜の宿泊地(予約済み)先であり、国道42号沿いにある国民宿舎「紀州路みなべ」までは車で20分程度であった。

10月28日終わり

X I. 【道成寺】



「紀州路みなべ」を朝8:30出発。昨日の天気が嘘のように快晴である。

42号を北上、標識に従って「道成寺」には容易に行けた。門前町の手前にある駐車場に駐車(400円)。

短い門前町を抜けると、北方にすぐ石段と仁王門がある。能の道成寺の乱拍子はこの石段を象徴したものといわれている。62段の石段を登りつめると仁王門、境内に入ると、正面に入母屋造の本堂が立ち、護摩堂・三重塔・念仏堂・十五堂・縁起堂・僧坊などがある。又境内には安珍清姫の伝説にまつわる安珍塚・蛇塚・鐘楼跡などがある。

縁起堂に入って(500円)、坊さんの「絵とき説法」を聞く。これは人気が高く、大広間に百人以上が集まり、既に始まっていた。

道成寺縁起絵巻のコピーを使って話上手なお坊さんが、この絵巻の物語を女の一念の恐ろしさにユーモアを加え、恋の哀歓と情緒をこめて絵解きするのである。

この寺には、三つの伝説が重なっている。初めは寺創建にまつわる「髪長姫」の説話である。即ち、昔この地の漁師が海中から黄金の仏像を得て、草庵に祀り、祈ったところその娘は長く美しい黒髪を授かった。娘はやがて都に上り、藤原不比等の養女となり、宮子姫と呼ばれ、文武天皇の妃となった。聖武天皇の生母はこの宮子姫であるという。この寺はその縁によって、大宝元年(701)に文武天皇の勅願によって紀道成が建立したと伝えられる。

二つ目がいわゆる安珍清姫の説話であり、三つ目がその後日談である。

能「道成寺」、歌舞伎「京鹿子娘道成寺」などはこの後日談を主体としている。

それは、この鐘で有名な寺に何故今でも鐘が無いのかと言う謎に関する説話になっている。安珍清姫の事件の400年の後、蛇身となった女に溶かされた鐘の再興供養の日に白拍子になった女の霊が現れ、供養を妨害するという説話である。

実際は、秀吉の紀州攻めの際、取り去られて現在は京都の寺にあるようである。鐘楼跡の横には、「京鹿子娘道成寺」を初めて踊った(宝暦三年1753)中村富十郎の碑(その初代のかどうかは確かめていないが)なども立っていた。(上右図)

説法で面白かったのは、いかに女の執念が恐ろしいかを説いた後に、家庭幸福の基は「妻宝極楽」にあるという説を説いていたことだった。これは「西方極楽」をもじってこの寺で作られた熟語であり、妻君を大切にすれば必ず家庭は極楽の様に幸せに成ると言う男性に対する戒めである。私なども、大いに心当たりのあるところである。

一寸うるさい事を言うと、熊野中辺路刊行会「熊野中辺路」(この本は歴史的考証がしっかりしているようである)の説明からの勘案では今、絵とき説法に使われている絵巻は、この寺の応永年間(1394-1429)成立の道成寺縁起(重文 詞書は後小松天皇、絵は土佐光重とされる)そのものではないらしい。それには安珍も清姫の名も現れていないらしいからである。

清姫の名は寛保二年(1742)上演の浄瑠璃「道成寺現在蛇鱗」で初めて登場するのだそうだ。

この地方には、道成寺縁起と呼ばれる絵巻が相当出回っているが、殆どは近世に現在流布されている話に基づいて浮世絵師などが描いたものらしい。

人口に膾炙している物語のその新しい絵巻を用いて、寺の経営に役立てた知恵者が居たのだろう。縁起堂の壁面には、一杯に名優達の「娘道成寺」の舞姿の絵、写真などが飾ってあった。帰りに門前町で、お土産に「釣り鐘まんじゅう」（鐘の形をしている）を求めた。



XII. 【紀三井寺(第二番)】

川辺ICで「湯浅御坊道路」（有料）に入り、海南ICまで一気に走る。

そこで再び42号に入り、和歌山市へ向かう。42号から一寸入った所にある紀三井寺は容易にアクセス出来た。町中だけあって駐車料金が700円と高い。

西国第二番札所 紀三井山・金剛宝寺護国院 通称・紀三井寺である。

通称は、寺の周囲に清浄水・吉祥水・楊柳水の3つの井戸があるので三井寺の名が生まれ、近江の三井寺と区別するため紀の字をつけたといわれる。

開基は770（宝亀元）年、為光上人が唐から渡来し、十一面観音を本尊として創建したのが始まりとされる。山麓にある朱塗の楼門をくぐり、231

段の石段を登って高台に出ると、六角堂・鐘楼・大師堂が一直線上に並び、左手奥にはどっしりした本堂が、その右手小高いところには開山堂と多宝塔が立っている。本堂の境内広場には樹齢400年、周囲6mほどのクスノキの老木が茂る。そして関西一早咲きを誇る桜も多く、開花期には桜祭りが行われ、大勢の人出で賑わうようである。松尾芭蕉も和歌浦を訪れた折り、ここの桜を詠んでいる。

見上ぐれば 桜しまふて 紀三井寺

と、すでに花が散り、見られなかったことを残念がった。

その句碑は石段の中ほど、今でも清水が湧き出ている（筈の：何故か本日は湧き出ていなかった）清浄水の前に、自然石に刻まれていて数基の歌碑や句碑とともに並んでいる。また高台からの眺めはよく、和歌の浦が一望できる。



XIII. 【根来寺】

駐車場からすぐ、北上する道路に入り、暫く行くと広い道路（和歌山バイパス）に入ることが出来た。紀州大橋を渡り、紀ノ川の北岸を暫く東進し、根来街道に左折すると間もなく根来寺(おんろ)に着く。

この寺の寺域は実に広い（約119万²）。立派な大門(上左図)から寺の中核部分近くの駐車場（無料）までも可成りの距離である。拝観料は500円だがこの寺は見所が多い。

多宝塔（国宝）、大師堂（国宝）、大伝法堂のある一郭は特に素晴らしい。(上右図 中央は多宝塔)

大治5年（1130）、覚鑿（カハシ 興教大師）が高野山中に伝法院と呼ぶ一堂を建立したのが起源である。のち、正応元年（1288）伝法院などを高野野山から根来に移し、寺は全盛を迎え、戦国時代には寺院数2700以上、

領地七十二万石、僧兵1万人余を有し、根来衆といわれる武力集団と化し、特に卓越した鉄砲隊をもっていた。豊臣秀吉の紀州進出の折りは雑賀、太田の軍勢とともに抵抗したが敗れ、多宝塔と大師堂だけを残して灰燼に帰した。元和9年（1623）徳川頼宣により寺領二百六十石の寄進を受け再興の運びとなった。

根来寺に何故強力な鉄砲隊があったのか？歴史を探っていくと誠に興味深い。

その辺の所を、司馬遼太郎 「街道をゆく」 8. 種子島みち から少し長くなるが引用してみよう。

「鉄砲を持ったポルトガル人がこの種子島に漂着したということは風浪がなした偶然で、漂着点が九州のどの海浜であっていいのである。

当時、島主はよく知られているように、種子島時堯（トキヲ）であった。その屋敷に、紀州の根来寺の一員津田監物が長滞留していたということが、重要とっていい。津田家は、紀ノ川筋の大土豪で、（高野山から別派をたてて新義真言宗の本山になった寺）の僧兵の大將あるいは一山の政治経済の切り盛り役のようなことをしていた。根来寺というのは戦国乱世のころには七十万石ほどの経済力をもっていたともいわれるから、津田監物の地位は大きかったであろう。

そういう紀州きっての実力者が、上方からみれば夢のように遠いこの島の島主屋敷に長逗留していたということが、この島の位置を想像するのに手がかりになるといい。根来寺が海外貿易をやっていたことは、たしかである。

津田監物は貿易の主管者だったように思える。当時独立国だった種子島もまた琉球経由であれ、直接であれ、対明貿易をやっていたことはたしかで、となると紀州根来寺と種子島は、貿易を通じて一体のような姿だったにちがいない。

『芝辻文書』の「鉄砲由緒紀」には、津田監物は種子島にとどまること十余年とある。滞留しっぱなしということはあるまいから、十余年も紀州と種子島を往来していたということであろう。

この津田監物が、種子島時堯からポルトガル製の鉄砲を一挺もらったことが鉄砲の伝播になり、戦国の様相を、割拠から統一へむかわせる力をつくるにいたる。」（以上 引用終り）

この一郭から少し離れたところにある「本坊」の奥御殿にある庭園は国から名勝に指定されているが、室町時代築造の池泉式蓬莱庭園で、北西に山を負い、奇岩怪石を縦横に配してあり、確かに名園の名に恥じない。

XIV. 【粉河寺(第三番)】

根来街道を少し戻り、県道11号を東進すれば、そのまま粉河寺（コカテラ）に到着する。

第三番札所 風猛山 粉河寺 である。

茶店の前の駐車場（500円）に止める。茶店に入り、山菜うどんて簡単な昼食とする。

この寺は、宝亀元年（770）の創建と伝える。中世には高野山、根来寺に次ぐ僧兵を養い、堂宇550、寺領四万余石を有して隆盛を極めたという。天正13年（1585）豊臣秀吉の紀州攻めにあつて堂塔を焼失した。のち江戸時代に紀州徳川家の援助を受けて再興した。

豪壮な大門を潜ると石畳の参道が鉤の手に曲りながら境内の奥へと伸びている。参道の左側に本坊である御池坊、童男堂ほか大小20余の諸堂が並び、右側に流れる小川が縁起絵巻で有名でこの寺の名前の由来でもある粉河である。

やがて中門を潜ると、その奥に名勝粉河寺庭園や壮大な本堂がある。

この当たりの景色は、他の寺とは雰囲気異なり、青々としていて実に気持ちがいい。それには庭園も大いに与っているが、本堂の前方、石段の左右にある桃山時代の枯山水庭園がそれで、本堂前の崖地を利用したおびただしい石組と、サツキ・ソテツの植栽がみごとである。



XV. 【施福寺(第四番)】

ここから次の施福寺までは一寸距離がある。



東に5 kmばかり行ったところにある国道480号に入り、どんどん北上する。あまりにも狭い道なので心配になって、工事をしていた男に聞いてみたが、「間違いない。これは三級の国道だよ」と笑っていた。

曲がりくねった山道を20 kmばかり走り、「大野町」の交差点を右折して少し行くと、施福寺の標識が現れる。槇尾山・仏並線である。この道路をどんどん登っていくと終点が施福寺(セフクジ)の駐車場である。ここに着いたのが午後4時頃だった。

西国三十三所は、四国や坂東に比べて、登りの厳しい寺が多いが、段々と整備されてきて、今残っているのは、第十一番の上醍醐寺と此処であるらしい。

それでも私は、この3月上醍醐寺に裏道からアクセスして比較的楽にお参りする事が出来た(この様子については、西国ドライブ巡拝記<1>を参照されたい)。しかしここは、まともに登るしか無さそうである。

カメラ1台だけの軽装で登りだしたが山門のあたりで、はやばて気味に成ってきた。降りてくる男に聞くとまだまだであるとの事。男の持っていた杖を譲り受ける。気が付かなかったが登り口に沢山置いてあったそうで帰りに返す事にする。

ここから道は更に厳しくなり、急な石段も何カ所がある。

途中に弘法大師の20歳の折りの剃髮所である愛染堂(上左図)など茅葺きの小さなお堂がひっそりと立っていて、既に夕暮れも迫っている事もあり、誠に宗教的な雰囲気満ちていた。

35分ほどかかって汗をびしょりかいて本堂に到着した。

第四番札所 槇尾山 施福寺 である。

この寺の草創も古く、欽明天皇の時代に行満上人によって開かれ、役行者や行基菩薩もここで修行したと伝えられている。

回りが薄暗くなってきたし、疲れもひどいので、納経後、納経所で近い宿を紹介して貰う。駐車場近くの宿に電話してくれる。そこも今夜は団体客があり、「大きな部屋」しか空いてないが良いかとの事で泊まれれば良いとした。

納経所の男は、もう一つ在るのだが、一人はいやがると言う。訳を聞くと一人だと自殺だとか問題が起こる可能性があるというのである。過去にそのような事が在ったのだろうか？

その槇尾会館に着いた時はすっかり暗く成っていた。駐車すると、団体のミニバスが数台私の車の横に駐車、そのエンジン音の中で、自分の車がまだエンジンがかかっている事をうっかりして、ドアロック状態でドアを閉めてしまうという大ミスをしてしまった。

この現象は、私の車(トヨタ・ビスタ)では起こらないのである。エンジン・オンでは、ドアロックはかからないようになっているからである。

それで初めてJAFのお世話になることになった。旅館から電話後50分ほどで若い男が現れ、簡単に(1分と

かからなかった) あけてくれた。話を聞くとこうしたことは時々あるそうである。

「大きな部屋」と言う意味は、別の「離れ」の事で、20畳の部屋に洗面所などがついた別棟に一人で泊まることになってしまった。

夕食後、おばさんが申し訳なさそうに「ここはお参りする人用の旅館では無いので」と言いながら、15000円の請求書を出してきた。この辺のことを気にして、納経所の男は遠回しに説明してくれたのだと理解した。

10月29日終わり

熊野・西国ドライブ巡拝記 (5 完)

敏翁

9. 10月30日 (水)

第六番札所 壺坂寺

左に見えるのは、釈迦一代記 (レリーフ)

高さ4m、全長50m



XVI. 【壺坂寺(第六番)】

朝7:50旅館出発。国道170号に出て北上、国道309号に入り東進。JR和歌山線を過ぎてすぐ「戸毛」のあたりで田舎道に入り、ほぼ近鉄吉野線に沿って北上、壺坂山駅近くで国道169号に入る。それを南下しだすとすぐ壺坂寺の標識が現れてくる。

寺の駐車場(400円)に入ったのは9:30だった。

西国第六番札所 壺坂山 南法華寺 通称 壺坂寺である。入山料 500円

この寺は、大宝三年(703)に創建され、藤原期には、高野山を凌ぐ規模であったが、その後数度の大火のため、諸堂が焼失している。平安時代から眼病に靈驗あらたかな仏として信仰を集めていたようである。

ここは、お里、沢一の「壺坂靈驗記」で有名であるが、これは新しく、明治のはじめ、三味線の名手豊沢団平の妻「千賀女」により創られた浄瑠璃によってである。

それにあやかって、「サワイチ目薬」などというものも寺の施薬堂で売っているが、この寺の活動は広範囲に極めてアクティブである。

社会福祉事業として、養護盲老人ホーム「慈母園」、「五色園」、特別養護老人ホーム「光明園」を運営し、加えて、精神薄弱者厚生施設「県立明日香園」の経営受託も行っている。

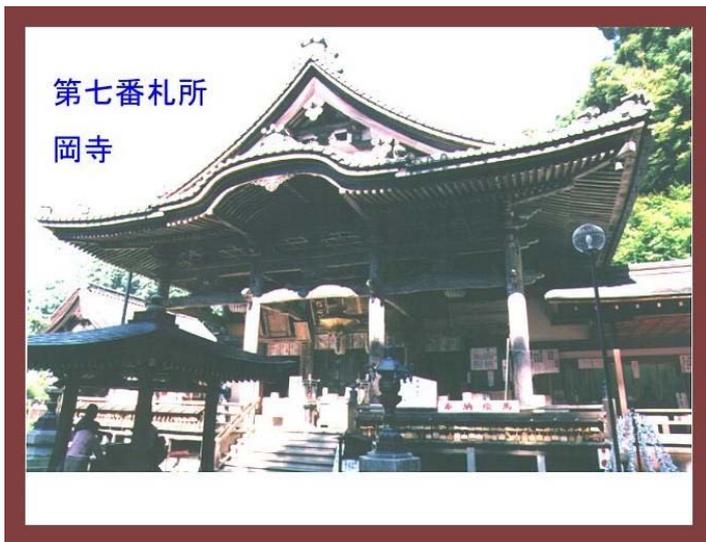
また、インドと積極的に交流を行い、ハンセン病救済活動への奉仕など行っている。



それによる仏恩か、インド政府、国民の支援をうけて、寺域には、インドの石材による建造物が誠に多い。
大石堂（平成4年落慶）、高さ4m、全長50mに及ぶ釈迦一台記レリーフ（昭和61年完成 前頁下右図はその部分）のいずれも大きくて素晴らしいが、圧巻は大観音石像（昭和58年開眼法要 前頁）である。
この高さ20m、全重量1200tの石像は、全部インドで石工7万人によって手作りされ、66に分割、輸送され、ここで組み立てられたものという。
この寺とインドの深い信頼関係が解る。
さらに目立たないが、インパール作戦で戦死した英霊の慰霊碑もある。インドとの信頼関係の中で遺骨の収集が行われたのである。

駐車場に戻って、管理人の親父さんと話をしていると、先代の住職が偉かったのだそうである。

XVII. 【岡寺(第七番)】



壺坂寺から次の岡寺までは、古代史の遺跡、古陵の宝庫である。高松塚、橋寺、石舞台などのそばを通過して岡寺の駐車場（500円）に着く。

西国七番札所 東光山 岡寺 正式名 龍蓋寺 である。 入山料 500円

この寺は、天智天皇二年（663）義淵僧正が草壁皇子の住んでいた岡宮をもらって建ててのがはじまりで、通称岡寺と呼ぶのは、ここからでたものである。

寺域は、広すぎず、狭すぎず、丁度紅葉が始まった庭はすがすがしい。その中にある十三重の石塔も景色に良くマッチしている。

(上右図)

内陣に上がり、本尊・如意輪観音（重文）を拝観する。この白い高さ約4.5mの塑像仏は印度、中国、日本三國の土で弘法大師が造ったとされるものだが、実に気品のあるお顔立ちである。

XVIII. 【法起院、長谷寺(第八番)】

県道15号を北上、国道165号に入り、東進長谷寺に入る狭い道に入る。

暫く行くと

番外 豊山 法起院 通称 得道上人廟 に至る。寺の横に小さいが無料の駐車場があり、そこに止める。

西国三十三観音と得道上人との関係は、本第二報の「青岸渡寺」の項に記したが、この法起院が、晩年上人が隠棲されたところで、天平七年（735）80歳で、ここで入寂されたと伝えられている。

小さな本堂に本尊として得道上人が祀って在る。その裏にある上人御廟の十三重の石塔は立派なものである。

そこから又狭い門前町を抜けていくと、長谷寺の門前に至る。



そばの駐車場（500円）に止め、寺に向かう。

西国第八番 豊山 長谷寺 通称 初瀬寺 である。 入山料 500円

この寺は、朱鳥元年（686）道明上人の開創による。この寺の見所は、何と言っても仁王門（現在は明治27年の再建）に繋がる「登廊」であろう。百八間の回廊形式の登廊(上右図)は399段の石段があり、丸い風雅な長谷型灯籠が数間おきに下がっている。夜は一斉に灯がともるそうだが見てみたいものである。



登廊を登ると本堂に至る。本堂（重文）は、舞台造り、奈良東大寺に次ぐ大きな建物で、本尊の十一面観世音菩薩（重文）も高さは光背を含めると12m余もある金色に輝く我が国最大の木造仏である。

この寺は、万葉集、古今和歌集、枕草子、源氏物語、更級日記、蜻蛉日記などに現れる寺であるが、何度も大火に会っており、現在の本堂は慶安三年（1650）徳川家光の寄進により再建されたものであり、本尊も天文七年（1538）の作である。本尊の前に立つと、その大きさに圧倒される。昔の人々は有り難さに思わず涙がこぼれたのではないか。

外舞台からの眺めは絶景と聞いていたが、工事中で入れないのが残念だった。

門前町の食堂で簡単な昼食をとる。

XIX. 【南円堂(第9番)、正倉院展】

165号を戻り、国道24号に入り北進する。北進約22km、右折して奈良公園に向かう。県庁前から奈良公園に入り、国宝館前の駐車場に入る。ここは興福寺の境内整備協力料と称して900円と高い。

そこから 西国第九番札所 興福寺 南円堂 はすぐである。

南円堂は修理中（工事は終わったが、開眼供養<？>が済んでない）と言うことで堂の正面に板が打ち付けられていて何の風情もない。



このあたりが、興福寺の官僚制の悪いところだろう。杉本苑子さんも「西国巡拝記」の中で、痛烈に批判していたが、その体質は殆ど改革されていないようである。もっとも杉本さんは、納経所のお爺さん達にも雷を落としていたが、私にとっては親切なお爺さんだった。



丁度、奈良国立博物館で、第48回の正倉院展が開かれていたので、久しぶりに行って見た。平日なのにすごい人だかりである。その人たちの身なりも表情も、札所に集まってくる人たちとは全く異なり、若さと華やかさをひしひしと感じた。気が付かなかったが、今まで回ってきた場所が年寄りじみ過ぎたのか？ 少し反省する必要があるかも知れない。

かって、20年も前迄は数回来たことがあったが、その時と違い新館が出来ていて、そちらで展示されていた。

駆け足で一通り見たが、かつての様な感激を感じないのは、どういう訳なのか？ 帰る時間を気にしていたためか、関心の対象がずれてきたためか？

【新大阪駅へ】

午後3:30分駐車場出発。奈良公園内を通っている国道169号を南下、天理ICで西名阪自動車道に入る。藤井寺ICで降りてすぐのところにある第五番葛井寺(ツツジ)にお参りする予定であったが、高速の渋滞がひどく、納経所の終了(午後5時のところが多い)に間に合わなくなったので、あきらめ、そのまま松原Jctから近畿自動車道に入り、大東鶴見で高速を降りた。

ここから新大阪駅(ここでレンタカーを乗り捨てにする契約になっている)への行き方がはっきりしない。鶴見緑地を突っ切って479号を左折、ガソリンスタンドに飛び込む。ここで満タンにし、道を聞く。

ガソリン消費量 43.3リットル。

勘は良かった。そこから100m程の交差点を右折し国道1号線に入り、そのまま進んで梅田新道に登り新大阪駅まで一気に行く事ができた。

適当なところに駐車、駅舎に飛び込んで、警備員らしい男を掴まえてレンタカーのオフィスの場所を聞く。ここは2階で、オフィスは1階であると車での行き方を教えてくれる。そこからなんなくオフィスに行けた。

総走行距離 514km。

心配していた知らない土地の大きな駅へのレンタカーの乗り捨てだったが、比較的簡単に出来、又自信が付いたような気がする。

帰りは、時間が不確かだったので、新幹線は自由席しか取ってなかったが、丁度良い新大阪発で新横浜停車の「ひかり」午後6:57発があり、それに乗る。疲れがどっと吹き出した感じで、重い荷物を持って動き回る気がせず新横浜から自宅までタクシーで帰った。

【後記】

文章の途中に、旅行記と異質な説明などが入りすぎ(特に「熊野三山」の関係)、読みにくかったのではないかと思います。

これは、私の経験から言って殆どの読者が「熊野三山」について予備知識が無いという前提の下で、且つ在る程度その歴史にも触れたいと思ったからです。

このやり方は今年の南仏・カタロニア・ドライブ旅行記の異端「カタリ派」のあたりから試みているのです。

それは、旅行の前に図書館から関係する書籍を借りまくり、関係しそうなところを片端からOCRでMOに読み

込む事をやっいて、そこから引っぱり出して多少の手直しで大きなブロックとして張り付ける方式です。

本当はもっと自分の文章の中に練り込む必要があるのですが、実力不足で申し訳ありません。

尚、PCVAN の SIG 日本トラベルクラブ「NTRAVEL」 の会議室 東西南北「日本の旅」にも殆ど同じ文章が掲載されています。

平成8年11月16日

阿部敏雄(敏翁)

【CD-R 版後記】

本 CD-R 版に用いている画像は、ある会合でこの旅行記の内容をスライド・ショー形式でビデオ・プロジェクタを用いて画像のみを映しながらプレゼンテーションした時に用いたものです。それでこの CD-R 版の画像にはあまり似合わない枠が付いていますが、それを取り外そうとするとかなり手間がかかるのでそのままになっています。

平成12年10月6日

阿部敏雄(敏翁)